

第7章 ● 日本初の反戦喫茶

基地前一〇〇メートルに拠点

「LOVE」そして「PEACE」と落書きされた薄暗い階段を上る。ギシッ、ギシッ、ギシッ。古ぼけた建物が耐えかねて悲鳴を上げる。

音楽が流れて来る。激しさの中に一種のけだるさを感じさせる不思議なメロディ。ジャニス・ジョップリン、ジミ・ヘンドリックス……。ウッドストック世代と呼ばれる彼らが歌い、奏でるロックが訴えるものはただ一つ。平和への切なる思いだった。

「GI COFFEE HOUSE (米兵のコーヒー店)」と書かれたドアを開ける。音楽のポリリズムは一段と高まる。見渡すと、米兵とおほしき二〇歳そこそこの若者らがテーブルを囲み、何か盛んに話し合っている。アルコールが入っているせいか、陽気だ。傍らで日本の青年が耳を傾け、時折りうなずく。

三沢市でバーが立ち並ぶ中塩小路。米軍基地の正面ゲートまでわずか一〇〇メートルの距離にその店はあった。日本初の反戦喫茶「OWL (アウルフクロウの意味)」である。一九七〇年のことだ。米国でわき起こった「ベトナム戦争反対」のうねりは世界をのみ込み、日本列島にまで広がっていた。本州最北の基地の街・三沢も例外ではなかった。

「なかなか状況を呈していました。店では結構、米兵が会議したりしていて。一〇人以上はいたでしょう。反戦運動に関心がある者にとつては知られた店でしたね」とは、青森県弘前市出身のルポライター、鎌田慧氏の回想だ。

当時、むつ小川原巨大開発の取材に熱中していた鎌田氏にとつて、三沢も関心のあるテーマの一つだった。なんとと言っても、沖縄が日本に返還される一九七二年まで、三沢は国内最大の米空軍基地だった。

ミニ新聞「北斗新報」の経営者として、ジャーナリストの目で基地を見続けてきた三沢市在住の伊藤裕希氏と言う。

「北日本で反戦と言えば三沢。そして、その三沢にはアウルがあった。ある意味で平和運動、基地反対闘争の象徴だったのです。髪の高いヒッピーのような連中が住



「アウル」に上がる階段の途中で。手前真ん中が原田氏で、後ろは出入りしていた米兵（『週刊朝日』1970年10月30日号）

み込みながら商売抜きで店をやっている、そんなイメージで、実際その通りでした」
米軍内の反戦運動を基地の外から支援しよう……。それがアウルの目的だった。無党派の反米主義を掲げるベ平連が空き店舗を借り上げ、一九七〇年七月に開店した。

ベ平連は「ベトナムに平和を！ 市民連合」の略で、徹底した市民・平和主義の下、大規模なデモなどを通して戦争反対を訴えた。現在の市民運動のさきがけと呼べる存在で、作家の小田実（故人）や開高健（故人）、哲学者の鶴見俊輔が中心になって結成された。

そのベ平連からアウル運営のために送り込まれたのが、東京出身の原田隆二氏だった。現在は五九歳。渋谷の繁華街で不動産業を営む原田氏は三十八年前をきのう

のこのように振り返る。

「三沢には反戦の基盤がありませんでした。だから、拠点にしようと考えたのです。日本がベトナムの人々を殺すための不沈空母になっている。この状態をどうにかしなくてはいけない、米軍基地を一センチでも後退させることができないか、その一念でした」

原田氏はベ平連事務局から「これは極秘活動だ」と告げられた。ヒッチハイクで三沢を目指す二一歳の青年の心はいやが上にも高ぶった。

日米公安が監視対象に

「三沢で基地反対運動をやると陸奥湾に浮くよ、と冗談半分に言われたものです。一種の警告だったのかもしれませんが。でも、怖くはありませんでした。三沢で死んでもいい、と腹をくくったんです」

原田氏はそう語ると、ちよつと苦笑いした。一九七〇年七月。悲壮な決意の下、原田氏は東京から三沢に向かった。

「死ぬかもしれない」。そんな彼の心境は無理もなかった。国内では反戦運動が燃